

『飯沼始末録』について

『飯沼始末録』（あるいは『飯沼始末記』など多くの書名を持つ。本稿では『飯沼始末録』で統一する）については、早く中村幸彦氏による概説がある。それによれば

実録。後に演劇や語り物になった。いざり勝五郎妻初花の箱根権現の靈験による仇討の原話。書名や巻冊数も一定しないで、写本で伝わった。【内容】古形を存するものは、『飯沼実録』『飯沼敵討』『飯沼始末録』などと題する一群。文章も繁簡一様でない。筋は、天正十二年（一五八四）太閤秀吉大坂築城の時、旗本飯沼勘平が女性問題で、同僚加藤幸助に討たれる。十三歳の一子初五郎元治が八年間苦勞の上、文禄元年（一五九二）箱根で敵を討った話。その間、忠義な家士の水死、兵法師範九十九新左衛門の草履取となり、娘かよに見染められる一件。江戸へ出る途中に病氣・乞食・躰となるなどさまざまの困難。村人に恵まれたいざり車で敵を求め、箱根山中で薩摩浪人杉並主計の助勢と

藤 沢 毅

神護で、最後に足が立ってめでたく仇を取る。大坂へ帰参。関ヶ原陣での討死が付記される。^②（中略）『箱根靈験飯沼実記』などと題するものは、箱根権現が登場、評や付記はなく、完全に読み物となっている。【影響】演劇では、浄瑠璃『箱根靈験躰仇討』（享和元年、司馬芝叟作）が出現し、すぐに歌舞伎化されて今日に至っている。小説では、『絵本箱根山靈伝』（享和三年、速水春曉斎画）は、その読本化。合巻は、演劇からの影響も大きく、『箱根靈験躰仇討』（文化四年、式亭三馬・歌川豊広）などがあるほか、ちよんがれ・音頭などの材ともなる。^{（注2）}

とある（傍線は稿者が付した）。本稿では、この概説を享け、この実録を論じてみたい。

管見の諸本を見るに、初期の状態を残しているものには序が付されている。書名、巻数に小異はあるものの、ほぼ次のような形である（原漢文のものが古形と思われるが、書

下しの形を採った。傍線稿者)。

醍醐飯沼始末録序

唐土晋の豫讓、炭を呑んで声を啞し身に漆を差し容を
変へ、終に知伯の讐を報ふ。人として忠孝義志無きは、
木石に異ならず。今書頭して十卷、時に天正十二年豊

臣太閤秀吉公大坂城築き給ふより関ヶ原合戦まで事^③を
記す中に、太閤御旗本飯沼勘平元勝一子同苗初五郎元
治、諸国危難を凌ぎ、文禄の始め年来の望みを達し、
其始末書、薩士真嶋坂左衛門賢義委敷く写し、予其末
流を乞求め、全部十余なり。太閤起亡飯沼始末録と題
す。予時光既に八旬有余傾くまで都て雑談実記を好ん
で数十部、眼を照らす人の物語。耳をそむきて、此飯
沼元治ほど哀れ深く又潔き書見聞いたさず。天正十二
年より文禄始まで八稔を経て本望を達す。末は関ヶ原
一乱、敵味方眼を驚かして討死して、名を万天に上げ、
是後代武士の鑑なりと云々

文禄元年

千早住楠末流

孔楠家^(注5)

角書に「太閤起亡」とあり、これは外題や内題にも共通
するのだが、物語の世界が「太閤記」に關係することを示
している。中村氏概説中の傍線部①②、序文中傍線部③④
に記されるように、物語は秀吉の伏見築城から始まり関ヶ

原合戦に終るのだが、それにしても「太閤起亡」とは強調
のし過ぎの感がある。何故ここまで「太閤記」の世界の強
調がなされたのであろうか。結論を先に述べれば、「太閤
真頭記」の成立流行を踏まえての設定であり、それが当時
の実録あるいは通俗軍書の一つの書式であったと推測して
いる。

「太閤真頭記」と実録・通俗軍書の問題、また序文中に
ある他の問題はひとまず措いて、「飯沼始末録」の内容を
もう少し詳しく見てみよう。

巻頭の章題が「秀吉公大坂の城を築き給ふ事 付 頭如
上人石献上の事」となっているように、話は大坂築城から
始まる。問題は頭如上人の描かれ方である。秀吉が「四海
泰平の折柄何卒して宜敷地利を見立、居城を築くべし」
と思っている所に、頭如が大坂の地を勧めることとなつて
いる。秀吉がその勧めに従い大坂築城を志すと、今度は
「愚僧は何なり共、一品御手伝仰付らるべし」と援助を申
し出、結局築城にとって最も重要な石材を用意することを
約束するのである。頭如が触れを出し、諸国の門徒はたち
まちに石を運送してくる。秀吉は改めて真宗の力の大きき
に感じ入るのであった。

この譚そのものにも典拠があるのかもしれないが、それ
でも冒頭に設置したことには作者の強い意図を感じる。真
宗びいきの書き方、そして秀吉と真宗が友好的である点は、

『太閤真蹟記』もそうであるが、立耳軒作の通俗軍書『石山軍記』^(注)に強く表れている。これらの作品では、信長の石山本願寺攻めに対しての真宗側の必死の抵抗とその強さ、そして英雄として描かれた秀吉が最終的には真宗を保護する立場を採るといふ記述がなされている。当時の通俗軍書の作者あるいは語り手の多くが真宗と結びつき、また秀吉びいきの立場をとっていたことが、『飯沼始末録』にも共通しているのである。

築城工事の奉行には片桐且元、小頭に飯沼勘平と加藤幸助が任命され、工事は着々と進むのであるが、ここで事件が起ころ。勘平は偶然出会った女性・勝と恋に落ち、密会を重ねるのであるが、幸助がそれに気づき横恋慕をする。勝のつれない態度に腹を立てた幸助は、勘平を闇討ちし、勝を攫って逐電するのである。勘平の臨終の際の証言で、敵は幸助と知れ、勘平の一子初五郎当時十三歳が敵討に出立するという運びになる。ここでも、この事件を耳にした秀吉が大変立腹をし、初五郎に左文字の刀や、敵討の印書、金子を与えて励ますといふ記述がなされる。あくまでも、秀吉の気に入りの旗本である飯沼家の仇討物語という形を採っているのだ。なお、攫われた勝女は、結局幸助に殺されてしまい、もともと不義の關係であった故、敵討の本筋からはずれ、以後は言及され^(注)ない。

敵討に出立した初五郎は、中村氏の概説にもあるように、

さまざまな経験や苦勞を重ねていくのだが、本稿では触れない。九十九家の娘との恋愛譚にしても、病氣を患つての苦勞にしても、ある意味では敵討ものの定型であり、それほど着目するべきものはない。管見諸本の中、三原市立図書館蔵の『飯沼始終実記』のみには、九十九家を去った初五郎が盗賊の家に迷い込み、しかし堂々と振舞い襲われてもものともしないといふ譚が描かれる。実録の成長過程で挿入された譚かと思われるが、あまり成功しているとも言えない。しかし、英雄としての描かれ方を欲しての挿入とすれば、これも挿入を試みられるべくして試みられたものか。ここまでの話の中で一つだけ着目しておきたいのは、恋愛譚の中で和歌が使用されていることである。すなわち、勘平と勝女との密会の場では

更けて問ふ 夜半の残りも少なきを

又帰るさに何急ぐらん (勝)

きぬぐの別れかねたるやすらひに

明過ぎぬべき帰るさの道 (勘平)

九十九の娘かよから初五郎への恋文には

君が住む辺りの草に宿しても

見せばや袖に余る白露

同じくかよが初五郎の出立に際して

別れても心へだつな旅衣

幾重かさなる山路なりとも

といった調子である。立耳軒作品を始め、通俗軍書の類にはこういった趣向も少なくない。単に作者側の趣向なのか、それとも享受の側でそれを欲していたのか、今後考えなくてはならない課題である。なお、管見諸本の中、益田家本のみは初五郎が幸助と箱根で出会う場面での評注（十巻本では巻七巻末「初五郎車を貰ふ事 付 加藤幸助伊勢参宮の事」の章末にあり。八年ぶりに会ったといつても、初五郎にとつては必死に捜していた敵の顔であるのだから見間違える筈はない、との本文補助的な注の個所）の末に

世の中にかたわ車のなかりせば

いんぐわの廻る敵討もなし

との歌が添えられている。しかし、他の数本には、次の章の始め（十巻本では巻八巻頭「初五郎箱根に車をこぎ上る事 付 松並主計武者修行の事」の章の冒頭）に「世の中に牛の車のなかりせば思ひの家をいつか出まし。因果は車の輪の如く早くも報い来る。扱、初五郎、幸助が姿を見付し故……」とあり、こちらが原形であったように思われる。各章頭に、和歌、漢詩、故事成句、慣用句、その他中国古典籍中の著名な言い回し、などを備えるのは、近世の散文学や劇文学に頻出する形式であり、こちらの方は珍しいものではない。

さて、初五郎は辛苦の末、足を病み手漕ぎ車に乗るといふ状態になる。ここでやっと敵幸助に巡り合うという設定

だが、その舞台は箱根山であった。それは、「実に敵を狙ふ者は、富士の裾野、曾我兄弟の宮へ詣つれば、いかなる討難き敵にも神の導きにて験あり」という初五郎側の発案と、日光に隠れ住んでいた幸助が伊勢講の籤に当たり参宮に向う、という二つの動きから生じてくる。つまり、「敵討↓曾我↓箱根」という意識はもちろんだが、原形では日光、箱根、伊勢という三つの霊所が設定されていたのである。初五郎も敵を見つけたことを喜び「いまだ仏神も捨て給はず。兼ねて信心し奉る天照大神宮、力を添へさせ給ひて、一刀なりとも敵に手を負せ給へ」と祈るのであった。中村氏の概説中に「箱根靈験飯沼実記」などと題するものは、箱根権現が登場」とあったが、管見には入っていない（架蔵の『敵討箱根靈験記』では、題が変わっただけで、内容的な変化はない）。享和元年、司馬芝叟作の浄瑠璃『箱根靈験覽仇討』の成立を経て、架蔵本『敵討箱根靈験記』、中村氏言うところの『箱根靈験飯沼実記』など、少しずつ箱根が強調されるような変化が現れてきたのではないか。

幸助を見つけたものは、足が不自由な初五郎にとつて敵を討つのは容易ではない。そこで箱根山の難所に待伏せし、動きのとれないハンディを少しでも減らそうとするのであるが、この設定には説得力もあり成功している。しかし、実際にはハンディは埋まりきらず、初五郎も、せめ

て一太刀との思いで待受けていた。そこに登場するのが、助太刀となる松並主計である。西国の浪人で武者修行中の主計を見込んで、助力を依頼し、理由を聞いた主計も義侠心からそれを承知する。藁をもすがる思いの初五郎であったから、実際にはこのようなことも起こり得るのかもしれないが、これまで一度も登場していない主計が急に敵討の重要なキャラクターとなるのは、話の展開からは少々唐突な印象を受ける。立耳軒作の『天下茶屋敵討真伝記』（以下『天下茶屋』と略記）でも、敵を討つために辛苦を重ねた林源次郎が、万策尽きたかと思つた後に初めて、母の遺言の中にあつた鶴幸右衛門の事を思い出し、頼つて最後には助太刀してもらう形になっている。『飯沼始末録』の松並主計と似たような唐突な登場の仕方だが、しかし幸右衛門の場合は「母の遺言」という言わば伏線が敷かれていた（もつとも逆に、それならば何故もつと早く思い出さなかつたのか、という疑問も生じるが）。主計の場合は、初五郎の必死さを感じた神の導きで出会つたと、好意的に読むべきであらうか。

敵討の場面では、不敵な態度を崩さない幸助に対し、初五郎が矢を射込み、主計が両腕を切落とす。引出された幸助にとどめをさそうとした時、思わず足が立ち、見事敵を討つ。届出も出していない即時的な助太刀役にしては手を貸し過ぎている感もあるが、幸助の落着いたふてぶてしさ

を描くことで、助太刀の必要性と正当性を無理なく読者に感じ取らせるように工夫している。また、初五郎の必死な想いが病氣平癒という奇跡を起こす、という点など、この辺りの構成・描写は上手になされているようだ。評注に、晋の国の秋という女性が、母の看病中に自身の手足が萎えるが、母が回復したところ手足も直つたという例がひかれ、初五郎の足が回復したことの奇跡を無理なく伝えようとする補助が行われているが、かえつて蛇足の感がある。

文禄元年、敵討を成就した初五郎はその旨を公に届け出る。ここでの章題が「秀頼公誕生し給ふ事 付 太閤初五郎へ御加増の事」となっているように、秀吉は、秀頼誕生で機嫌の良い時でもあり、初五郎の敵討成就を大層喜ぶ。初五郎は加増の上五千石の旗本になり、父の名を継ぎ勘平と名乗る。主計もまた義心を評価され旗本に取立られる。この敵討の話が、あくまでも「太閤記」の世界の中で動いていることに留意しておきたい。その後、初五郎改め勘平は、敵討までの間に恩を受けた人々に恩返しをし、九十九家の娘かよを嫁に迎えることになるのだが、これら一連の報恩話も、「尤もなる心掛け、神妙也」と、みな秀吉による評価認定をされた上での行動となっている。

ここでもめでたしめでたしと話が終つても不思議はないのだが、しかし『飯沼始末録』の結末は別に用意されている。まず「一年経て慶長三年となり、太閤御逝去遊ばされける。

然るに同五年、石田治部少輔三成、家康公を討んと関ヶ原に陣を取り、所々の軍勢を招く事、夥しき事どもなり」と急激な話の展開があり、最終章「飯沼勘平敵陣を破る事付 池田備中守と組合の事」に入る。この章で勘平は活躍の後、討死を遂げるのである。この最終章、すなわち関ヶ原合戦における勘平最期の一段が後から付け加わったものでないことは、既に序文中に全体の構成が呈示され、「末

『石田軍記』

岐阜城川端合戦之事

去程に北の方の先鋒は池田三左衛門輝政、浅野左京大夫幸長、堀尾信濃守忠氏、山内対馬守一豊、有馬玄番頭豊氏、一柳監物、有楽斉、松下右衛門吉綱等と相定、八月廿二日に東国勢雲霞の如く川岸にぞ押寄ける。

爰に西軍の秀信は、早朝より手勢千七百余騎引率して河手村の焰魔堂に屯し、斥候を出て下知をぞせられける。同国上有知の城主佐藤才次郎、百々越前、木造左衛門、飯沼十左衛門、同勘平、前田半右衛門、斉藤斎、三成が加勢の河瀬左馬助等は、新加納村と大野の間に扣て待掛たり。時に越前下知しけるは「東国の武士共は元来馬上に達者なれば、河岸より三町扣て行馬を結、出入の口を付て、千人の足軽を四百人勝て行馬の前に備へ置、内に大筒を仕掛、六

は関ヶ原一乱、敵味方眼を驚かして討死して、名を万天に上げ」と記されていることから明らかである。諸本中には、この章が省かれているものもあるが、作者の意図としてはなくてはならないものであった。

ところでこの章は、『石田軍記』^(注9)を元に改変を加えて作られている。

『飯沼始末録』

飯沼勘平敵陣を破る事 附り池田備中守と組合の事

慶長五年八月廿三日、東国勢雲霞のごとく押寄る。

石田方は岐阜中納言秀信卿早朝より手勢千七百余騎を引率し、川手村のゑんま堂に屯し、物見して下知をせられける。大坂よりの加勢として飯沼勘平、川瀬左馬介等、新加納村と大野の間に待懸たり。然るに關東勢木曾川の逆波を少しも恐れざる気しきにて「渡せや者共。わたれや」と下知しける故に、關東勢木曾川のなかばを渡る前に、岐阜方より俄に鉄砲を雨のごとく打懸ければ、其鉄砲に当られいやが上に重りて、手負死人の流るゝこと血はもみぢちりて龍田川、腸たちて秦川渴謡をながすかと、あやしまるゝ。然れ共東国武士のならひ、死を軽んじ候に塵芥ともせず「進めや進め」と勇み立、一義にどつとむかふの岸に乗り

夫より兩陣共うつ討れつ火花をちらして相戦ふ。關東方

百人は河端に進で繰替に立て、敵河へ乗入ば、半分渡ると見し時に込替々々打立よ。呉子が曰「敵若絶水、半渡而薄之」と云へり。敵陸に乗上らば、行馬の才へ引取て、咄と駆て河へ追込討取べし」と、「五十騎の二備を河の上下両方の村の小陰に伏置て差挟で駆出すべし。敵散ずとも其俣に旗本へ集るべし」と云所に、東国の軍勢半河を渡るを見て、俄時雨の降如く打鉄砲に中られ、弥が上に重て手負死人の流るゝ血は紅葉散浮龍田河、腸断秦川流濁淫と云に異ならず。然れども東国武士の習ひ、死を厭ぬ素生にて、流るゝ骸を足だまりに「我も我も」と進みけり。其中に監物は近辺の黒田に在て、常々河の浅深を能知たる験にや、木曾川の逆浪を些も恐れぬ気色にて「渡れや者共、わたれ」とて其俣馬を乗入しは四郎高綱、謙信輝虎にも劣らぬ風情なり。是より池田、浅野、堀尾等統て馬を馳込ば、敵兵是を防んと撃連ぬる鉄砲を物の数とも思ばこそ、一度に咄と向の岸に騎あがれば、岐阜勢如何なる術にや、一町程退て火花を散し戦ひけり。

時に堀尾信濃守が兵卒に堤五郎兵衛、一柳が家臣大塚権太夫真先に進で一番に鐘をぞ合せける。堤は岐阜方の前田半右衛門と暫戦ひしが、終に前田に討れけり。大塚は武市善兵衛に渡り合、火出る程戦ひしが、武市終に突臥られ已に危見ゆる所に、武市忠左衛門馳付て救とせしかども、善兵衛が運命や窮りけん、大塚に首をば取れけり。

楮、岐阜方の侍大将飯沼勘平は、緋威の鎧に赤母衣を掛、

より堤五郎兵衛大塚権太夫真先に相並んで、岐阜方前田半左衛門と暫くたたかひしが、終に前田に討れける。大塚は武市善兵衛に渡り合、火花をちらして戦ひけるが、武市誤りて大塚に突伏せられ、既に危ふく見へし所に弟の武市忠左衛門馳付、大塚といどみ争ふ。大塚はまされるつわものにて忠左衛門をも突伏せ、兄弟共に首を取りてひかへたり。八田源八、大塚に突懸らんとする処を鐘のしほ首を取りてたぐり寄せ首をかく。此体を見て、岐阜方より出会候者なかりける。

然るに大坂よりの加勢に飯沼勘平、ひおどしの鎧に赤母衣懸し白足毛の五寸余り馬に打乗り、四角八方をねめまわして、あわれ能敵も有かなと伺ふ所に、大塚権太夫、武市兄弟八田三人の首を取りていかめしくも味方の陣に引んとするを見るより「その首を返せ」といふまゝに馬を彼所に乗りはなし、鐘を取りて追懸しは、飛行夜叉のあれたるごとく、あつばれ成る勇士かなと敵も味方も目を驚かしける。関東方には「あれ権太夫を討たすな、者共」としきりに味方も下知をなしければ、畏り、覚への侍十騎斗りも勘平を目懸て隔たり戦へば、面倒なりと勘平鐘をもつて四角八方に突ちらしけるに、今は勘平と権太夫と一騎打の勝負にて、たがひにはれ成軍なり。いかゞはしたりけん、権太夫即時に勘平に突伏せられ。あへなく首を取られにけり。勘平は猶も大音をあげ、「坪井七兵衛殿はおわせぬか。東国方に鬼神と聞へたる大塚権太夫を手の下に打留め候。中納言殿の御旗本に持参くだされて見参に入たまわれ」と聞より「坪井是に有り」と権太夫が首を受取り「いしくもなされ候よな。急ぎて披露仕らん」と七兵衛は旗本さしてぞ参りける。扱夫より勘平は馬を引寄せ、打乗らんとしけるが、向ふの岡に武者一騎ひかへたり。つゞく勢はあらざれ共、馬物の具のきらびやか、「是ぞ寄せ手の大将の其壹人にて

白葦毛の五寸余りの馬に騎、四角八方睨廻りて、適敵もが
なと窺ふ処に、大塚権太夫、善兵衛が首を捕て去る処を
「其首返せ」と云俣に馬を彼に乗放し、鎧をつ(ぞ)取て
追かけしは、飛行夜叉神の荒渡るもかくやらんと、血氣の
勇者にぞ見にける。一柳是を見て「あれ討たすな」と下知
すれば、五騎押並で衝来る。岐阜方よりも「続けや」とて
前田半右衛門、藤田権右衛門駈塞り相戦ひ、頓て大塚を突
臥すれば、勘平押掛て首をば取たりけり。「秀信の旗本へ
持参せよ」とて坪井七兵衛に渡しつゝ、馬に乗んとせしか
どもつけずまひして乗得ざりし処に刃を見れば、小高き岡
に能武者あり。馬物具の美々しさ、武者振のけだかさ、大
将と見へければ「一鎧」と云俣に「飯沼」と名乗掛て進み
しかば、東軍の池田備中守なり。少も臆せず馬を歩ませ進
む所に、輝政の兵に伊藤与兵衛と云者駈入てめて押隔つる
を、備中守是を見て「そこを引」とぞ怒りける。与兵衛は
是非なく立除ば、早槍を合せ、竜巻ば虎嘯の勢ひを作し、
風雲一百八盤索の分野にて、両方盛の若武者共、聞ゆる名
誉の手利、暫く勝負はなかりしが、何とかしたりけん、勘
平突れて倒るゝ所を備中馬より飛で下り、首を取んとせし
が、勘平河波と起上り無手と組、噛をして金剛力を出せど
も、手負武者の悲さは、備中守に組伏られ、遂に首をぞ取
せらる。^(注10)(以下略)

こそおわすらん。勝負仕らん」思ふより、飯沼勘平大方は
聞及れんと会釈もなく突て懸る。実にも飯沼が推量に違わ
ず、池田備中守にしておわしますが、少しも臆せず馬を進
めて鎧を合せ給へ。伊藤欠隔りて勘平と戦ふ。備中守大に
怒り「我にまかせよ。早く立去れよ」と仰せに伊藤是非な
く退く。備中守はやしとくゝと鎧を合せ玉ひ、世に見事な
る働きなり。まことに竜巻けば虎嘯くの勢ひ、一百八番の
めぐる有居。其盛んなる若武者、名にし聞ゆる手だれの
人と、暫く勝負は見へざしりが、何として勘平倒るゝ所を備
中守馬より飛下り首を取らんとし玉ふを、だましすまして
勘平がわと起上りむずとこそは組付たり。備中守は心得た
りと金剛力を出し玉ふといへ共、流石の勘平動きもせず、
良しばしもみ合し。勘平備中守を取りて組しき、既に首を
かゝんとしける所に、伊藤与兵衛後より来り首をはねんと
するゆへ、勘平直に備中守襟りがみをつかみ二三間も打付、
伊藤与兵衛と相戦ふ所に、備中守が勢雲霞のごとくどつと
来る。四角八方より勘平を討んと鎧をもつて突懸る。勘平
は壹人、多勢を相手に火花を散らして戦ひしが、身には数ヶ
所の疵を負ひながら事ともせず、四角八方に突きまわる。
あまり手痛くはたらく故、関東勢道を開き見物しける。勘
平はもはや相手なければ諸肌脱ぎて、心しづかに切腹する
こそいさぎよし。伊藤与兵衛欠付て、此死首を取りし。勘
平今年廿一歳を一期として切腹す。敵味方共におしまぬ人
こそなかりけり。

評に曰、石田軍記に飯沼勘平は岐阜黄門の家来と有れ
共、是は撰者のあやまり。尤岐阜には飯沼家多し。し
かりと言へ共、勘平は先祖より太閤の家来に相違なし
とかや。

いささか長い引用比較となつてしまつたが、まず『石田軍記』がこの個所の典拠になつてゐることを確認しておくことが重要かと思われる。全体の筋立てももちろんだが、「血は紅葉散浮龍田河、陽断秦川流濁淫」^(注11)「竜巻ば虎嘯の勢ひを作し、風雲一百八盤索の分野」^(注12)などの表現の一致からも、『石田軍記』からの転用は明らかであろう。

その上で大きな改変個所を取出してみると、①飯沼勘平を岐阜秀信の家臣から、大坂よりの加勢（つまり秀頼の家臣）に変えていること、②飯沼勘平をより英雄として描いていること、が挙げられる。①については、『飯沼始末録』末尾の評注で『石田軍記』の批判をしているのがおもしろい。これだけ典拠にしておいて批判（しかもその根拠も示さない）もなかるうに、とも思われる。なお、飯沼勘平が岐阜秀信の家臣であることは『関原軍記大成』等にも記されておき、こちらの方が軍書の中の言わば「常識」であつた。②は、まず勘平に討たれる大塚をより強い武者として描き、それを討つことで勘平の強さを強調。さらに、池田に討たれた形であつたのを、池田をも討取る勢いがあり、しかし衆寡敵せずゆえ華々しく自害する。突かれて馬から倒れ落ちたという個所を、「だましすまして」と勘平の計略であつたように書き換えるなど、精妙な改変と言えよう。『飯沼始末録』はここまで勘平を中心に描いてきた作品なのであるから、彼の英雄化は当然と言えば当然であろう。

しかし①の方はどうか。当時「悪」として描かれていた石田の側、評価の分かれる岐阜の側から離れたこともあるが、やはりここにも、飯沼勘平を秀吉の臣と設定することに對しての強い拘りが存在する。題名角書の「太閤起亡」といひ、『飯沼始末録』は太閤秀吉の家臣の飯沼の物語でなくてはならなかつたのである。

『飯沼始末録』の成立時期ははっきりと断定できない。序文中の「文禄元年」は論外である（第一、内容に慶長五年の記事が存在してさえない）。しかし、浄瑠璃「箱根靈驗覽仇討」の作られた享和元年以前（管見諸本の筆写年時で最も古いのは、同じく享和元年の十月写の矢口丹波本であるが、浄瑠璃が実録に先じたとは考えられない）であることは確定できる。浄瑠璃界に太閤記物の流行があつたのは寛政期であり、その末に「箱根靈驗覽仇討」も位置している。この背景には通俗軍書写本の『太閤真蹟記』の成立と流行があり、稿者はこの成立期を明和と安永期と判断している。^(注13)通俗軍書写本の流行として、この『太閤真蹟記』を軸に、『真田三代記』や、立耳軒作の『石山軍記』（前編明和八年序）『天下茶屋』（明和九年序）『後藤功名記』（安永九年秋序）『審訓清正実記』^(注15)などが生み出されている。ここに挙げた通俗軍書・実録は、太閤記の（あるいは太閤没後の）世界と関わりながら、それぞれの作品中に登場する英雄の姿を描いている。特に『天下茶屋』は、敵討ものという意味で

『飯沼始末録』に近い。この作品は関ヶ原合戦に絡んでの浮田家の御家騒動から始まり、父を闇討ちにされた林源次郎が、辛苦の後（家人の裏切り、兄が足萎えになり、さらに返り討ちにあうこと）当麻三郎右衛門を討つ、という話である。助太刀の鶴幸右衛門については既に触れたが、この話の結末では林源次郎は鶴幸右衛門とともに大坂夏の陣にて、真田幸村の影武者となつて討死した旨が記されている。つまり両作品とも、敵討の話を太閤記あるいは太閤没後の世界で包み、太閤没後に秀頼のために忠義を尽して戦死する、という点で共通しているのである。もちろん、敵討までの辛苦や助太刀の存在という点でも似ているのだが、こちらの方がむしろ従である。ただし、『天下茶屋』は、敵が大野治長の家臣となつており、片桐且元らと大野兄弟との反目の中での敵討という点に特徴がある。

さらにもう一つ類似作品を挙げれば、浄瑠璃『彦山権現誓助剣』（天明六年初演）の典拠となつた通俗軍書『豊臣鎮西軍記』がある。これまた、毛谷村の六助という助太刀を得ての、吉岡一味斎の妻子の敵討を、太閤記の世界で包んでいる。立耳軒作の『審訓清正実記』の中でもこの作品について触れており、ほぼ同時期の作品である可能性が高い。こうしてみると、この時期の通俗軍書・実録の中には一つの書式のようなものが存在していたと考えられるのではないか。

『飯沼始末録』の作者は、これも序文に「千早住楠末流孔楠家」とあり、兵法軍学者ということを誇張した、かえって怪しいペンネームから、軍談の講釈師であることが想像できる。通俗軍書や実録の作者は、講釈師でもあるか、あるいは講釈師と共通の土壌にいることは従来から言われている。軍書講釈は『平家物語』や『太平記』によるものから、より通俗的なものにも及び、その中で長編『太閤真頭記』が通俗軍書写本で成立し流行する。そこから亜流も多数生み出されていた。亜流は、『太閤真頭記』などに登場するある程度有名な人物をクローズアップして作り出す場合、または敵討物として構築する場合とがあり、共に亜流としての書式を持ったのではないか。後者の場合は、既成の軍書から時代と登場人物を設定し、出自と最期で前後を固め、中に工夫を凝らした敵討までの辛苦を描く。『飯沼始末録』は後者に属する作品であつた。

（注1）松並主計については、『飯沼始末録』諸本の本文では「西国」の浪人とあるだけで、薩摩浪人との旨は表記されていない。序文にある「薩土」からの推察か、あるいは別に松並に関する資料が存在するのか、未詳。松並が薩摩の出身だとすると、逆にこの序文中の「薩土真嶋板左衛門」がそのことから創作された人物である可能性もある。

（注2）岩波書店『日本古典文学大辞典』第一巻「いざりの仇

討物」の項。

(注3) 管見諸本は以下の九本(順不同)。

・ 広島文教女子大学本『太閤起亡飯沼始末録』(十巻五冊。有序)

・ 同『飯沼始末録』(二巻一冊)

・ 弘前市立図書館『飯沼始末録』(十巻十冊。有序)

・ 八戸市立図書館本『太閤起亡飯沼始末録』(十巻一冊。有序)〈国文学研究資料館マイクロフィルムによる〉

・ 山口県益田家本『飯沼始末録』(全十巻中、存六巻〈存巻五〜十〉一冊。天保十五年春写)〈同〉

・ 矢口丹波本『敵討飯沼始末録』(六巻一冊。享和元年十月写)〈同〉

・ 三原市立図書館本『飯沼始終実録』(十二巻二冊)〈同〉

・ 架蔵本『飯沼始末録』(十巻一冊。有序)

・ 同『敵討箱根靈験記』(全十巻中、存八巻〈欠巻七、十〉八冊。有序)

(注4) 八戸市立図書館本では「真鳥板右衛門」となっている。

(注5) 『飯沼始末録』の本稿への引用は、特に断らない限り、架蔵本を中心に八戸市立図書館本(国文学研究資料館マイクロフィルムによる)を補助として行った。引用に際して、私に句読点、「」「」を付した。また、漢字や仮名の表記を現代の我々にとって読みやすいようにと修正した。実録や通俗軍書写本では、原本通りに引用することにあまり意味が見出せないという見地からの措置である。

(注6) 『太閤真蹟記』は後に「真書太閤記」の名も持つが、

栗原信充編の刊本『真書太閤記』と区別するために、本稿では「太閤真蹟記」に統一する。

(注7) 後小路薫氏「唱導から芸能へ——石山合戦譚の変遷——」(『国語と国文学』昭和60年11月)に考察される。

(注8) ただし、注記の形で、勝女の死骸が発見され、手厚く葬られたこと、また、勝女の村は今の太仁村であることが記される。太仁村は、『真田三代記』で幸村が単

身家康を襲った場所としても描かれているが、関係未詳。

(注9) 『石田軍記』は元禄十一年の刊本だが、絶版となり(明和八年の禁書目録にも載る)その後は写本で、あるいは書名を『太平朝日軍記』などとも変えられ(やはり写本で)伝えられていた。関ヶ原合戦を扱った近

世中期の通俗軍書では、多く『石田軍記』を参照している。

(注10) 今治市河野美術館(河野信一記念文化館)所蔵本の元禄十一年刊本より(国文学研究資料館マイクロフィルムによる)。引用に際して、原文は漢字片仮名混じり

文だが、片仮名を平仮名に改めた。また通常「へ」で表記されるべき個所が、原文では「え」になっている

が、これは全て「へ」に改めた。

(注11) 出典未詳。

(注12) 出典未詳。

(注13) 松崎仁氏「寛政期の浄瑠璃復興」。『岩波講座』歌舞伎・文楽 第9巻 黄金時代の浄瑠璃とその後(平成10年、岩波書店)所収。

(注14) 拙稿「近世中期成立通俗軍書写本群の相互関係——立耳軒作品と『大閤真願記』『真田三代記』」(『鯉城往来』第二号掲載予定)の中で論述した。

(注15) (注14)に挙げた拙稿中に触れた。

(補記) 本稿には、一部不適切な表現がありますが、原資料にあり、当時の文化背景からなるもので、稿者の意図によるものではありません。